博士論文審査報告要旨

学位申請者　：Paulus Rudolf Yuniarto（パウルス・ルドルフ・ユニアルト）

学位論文題名：Bridging People, Seizing the Future: Indonesian Migrant Entrepreneurs in Taiwan and Return Migrant Entrepreneurship in Malang, East Java （人を繋ぎ、未来を掴む：台湾におけるインドネシア人起業家と東ジャワ・マランにおける帰還移民の起業家精神）

論文審査委員：主査　人文科学研究科准教授　石田　慎一郎

副査　首都大学東京名誉教授　伊藤　眞

副査　人文科学研究科准教授　田沼　幸子

I 論文要旨

1. 概要

本論文は、ルドルフ・ユニアルト（インドネシア科学院研究員）が、アジア人材基金の留学生として（首都大学東京人文科学研究科博士後期課程大学院生として）3年間にわたって実施した研究の成果を取りまとめたものである。本論文には、本研究科博士課程入学に先立って本人がインドネシア科学院研究員として実施した研究の蓄積のうえに、上記 3 年間に実施したフィールドワークで得たデータと知見を中心にして新たに展開した研究の成果である。

本論文は、(1)台湾の都市部に定住し、小規模な小売業やサービス業を営むインドネシア人起業家たちの来歴と現在のビジネス活動、(2)一般のインドネシア人移民（移民労働者）に対して生活面での様々なサポートを提供する起業家たちの社会的役割、(3)台湾での就労を終えた後のインドネシア人帰還移民による出身村での起業活動、についての詳細な民族誌的研究である。

本論文によってルドルフが明らかにしたのは次の事柄である。すなわち、台湾におけるインドネシア人起業家たちの日常的な活動は、狭い意味でのビジネスあるいは経済活動に限定されるもののではなく、一般インドネシア人移民たちの生活環境の改善に深く関与するものだということである。起業家たちは、主たる顧客であるインドネシア人移民に対して、同郷者どうしを、さらには台湾政府あるいはフォーマルセクターとのつながりを橋渡しする役割を果たすとともに、台湾での都市生活のなかで直面する様々な問題を解決するための相談役あるいはリソースパーソンとしての役割、さらにはトラブルを解決する調停者としての役割さえ果たしている。そうした起業家たちのサポートを受けながら台湾での就労

生活を終え、インドネシアに帰還した移民たちは、移民労働によって得た資金を元手に、出身村で自ら起業することを目指す。ルドルフは、さらに台湾からインドネシア・マランの農村に帰還した移民たちを追い、移民後の生活状況を観察した。そこから明らかになったのは、台湾での就労中に故郷に送金することで家族親族の生活改善に寄与することに加えて、移民経験を通じて得た起業や自己実現のための新しい知識や考え方を故郷の社会経済的文脈において再統合することで、新しい生活様式や社会経済活動の可能性を開いているということである。

2. 論文構成

・全 210 頁（本文英語、本文 77,910 語〔本文中の図表 21 点を含む〕、ほか参考文献一覧）

・目次

Summary i
Table of contents iv
List figure and table viii

INTRODUCTION
1. Indonesian Migrants and Return Migrant Entrepreneurship 1
1.1 Objectives 1
1.2 Background 3
1.2.1 Indonesian entrepreneurs and enterprise in Taiwan: From economic response to adaptive response 3
1. Migrant niche, home memories, and entrepreneurship 4
2. Social relations and entrepreneurship 7
3. Social solidarity and entrepreneurship 8
1.2.2 Indonesian return migrant entrepreneurship: Practices and challenges 10
1.3 Research questions for this study 13
1.4 Literature review and framework of the study 14
1.4.1 Entrepreneurship scope and definition 14
1.4.2 Defining terminology 15
1.4.3 The migrant entrepreneur and entrepreneurship: Locus and practices 16
1. Locus of migrant entrepreneurship study 16
2. Migrant entrepreneurship in Taiwan: Subject studies 18
1.4.4 Return migrant entrepreneurship in Indonesia: Between opportunity and challenge 21
1.4.5 Anthropological studies of entrepreneurship 24
1.4.6 Framework of the study 27
1.5 Method and research stages 29
1. Research in Taiwan 29
2. Research in Indonesia 32
1.6 Composition of study 34

PART 1 INDONESIAN MIGRANT ENTREPRENEURS IN TAIWAN
2. Profiles, Network, and Modes of Entrepreneurial Practices 36
2.1 The development of Indonesian economy (entrepreneurship) in Taiwan 36
2.2 Entrepreneurship profiles 39
1. How does migrant conduct business abroad? 39
2. From classic to virtual entrepreneurship 42
3. Partnership (collusion) entrepreneurship 44

4. Food and migrant media information entrepreneurship 46
5. Home and online entrepreneurship 48
6. Informal (street vendor) entrepreneurship 50
2.3 Making connections 51
1. General pattern of entrepreneurship relations 51
2. Network 1: Family across borders 53
3. Network 2: Friendship-based relations 55
4. Network 3: In-group entrepreneur 56
5. Network 4: Migrant-entrepreneur relations 58
2.4 Closing remark: Modes of entrepreneurial practices 59
1. Cultural practice 59
2. Structural practice 61

3. Social Activist, Patron, and Broker 65
3.1 Introduction 65
3.2 Indonesian entrepreneurs and social relationships in Taiwan 65
1. Entrepreneurs' position and the socioeconomic conditions of migrants 65
2. Positioning under the migration system 68
3. Entrepreneur as part of migrant community activities 71
3.3 Informant selection 74
3.4 Practicing social activities 75
3.5 Patron and broker entrepreneurs 81
1. Case one: Illegal/undocumented migrant patrons 82
2. Case two: Patron-and-Broker entrepreneurs 85
3. Case three: Broker entrepreneur 87
3.6 Entrepreneur as the bridge 90
3.7 A Symbiotic Mutualism 92
3.8 Conclusion 95

4. Religious and Altruistic Entrepreneurship 97
4.1 Introduction 97
4.2 Indonesian religious and altruistic entrepreneurship in Taiwan 97
1. Ideological motive 99
2. Humanistic motive 101
4.3 The biography of religious and altruist entrepreneurs 105
4.3.1 Religious entrepreneurs 105
1. Business as the form of *Amanah* 105
2. Missionary business practices 107
3. Business and bond of solidarity 108
4.3.2 Altruist entrepreneurs 110
1. Helping marginalised migrant newcomers 110
2. Comradeships and national ties 114
4.4 Practicing religious-altruistic entrepreneurship 118
4.5 Roles, functions and effects of religious and altruistic entrepreneurship 121
1. Role and functions 121
2. The effects of religious and altruistic entrepreneurship 122
4.6 Conclusion 124

PART 2 RETURN MIGRANT AND ENTREPRENEURSHIP IN INDONESIA
5. Migration, Entrepreneurship, and Its Effects 126
5.1 Introduction 126
5.2 Migration: Seeking capital for business at home 127
5.3 Making entrepreneurship at home 130
1. *Kampung* condition 130

2. *Kampung* tradition and business adjustment 133
5.4 Entrepreneurial strategies 135
1. Intensify family resources 136
2. Remittance management, family, and connections 138
3. Adapting business with local pattern 139
5.5 The effects of return migrant entrepreneurship 141
1. Self-transformation 142
2. Return migrant cooperatives 148
3. Changing personal status 149
4. Economic changing 150
5.6 Conclusion 152

6. Knowledge Production, Dissemination, and Economic Reintegration 155
6.1 Introduction 155
6.2 Knowledge production (entrepreneurship input) 155
1. Pre-departure 156
2. Experience and knowledge in Taiwan 157
3. After return 162
6.3 Coping with entrepreneurship (knowledge dissemination) 166
1. Self-awareness and social learning 166
2. Structural adjustment (village adaptation) 169
6.4 Entrepreneurship planning 173
6.5 Return migrant entrepreneurship: A way for economic reintegration 176
6.6 Conclusion 183

CONCLUSION
7. Conclusion: Bridging People, Seizing The Future 185
7.1 Indonesian entrepreneurship and entrepreneurs in Taiwan 185
1. Practice and pattern 185
2. The role and social functions of entrepreneur(ship) 187
3. Indonesian migrant entrepreneurship: Some effects of bridging the people 188
7.2 Indonesian return migrant entrepreneurship 190
1. From entrepreneurship to reintegration 191
2. Return migrant entrepreneurship: A reintegration strategy and carrier choice for seizing the future 193
7.3 Practical implication and suggestion 195

Appendix I: List of informant in Taiwan 197
Appendix II: List of informant in Malang, East Java 199
Appendix III: List of publication and conference during study 200
Bibliography 201

3. 論文概要

序論では、(1)本論文全体の目的（上記）についての概説に加えて、(2)本論文が主たる研究対象とする台湾都市部のインドネシア人移民の現状について概観する。台湾におけるインドネシア人移民は、2015 年 1 月の時点で 23 万 7670 人である。台湾政府統計によると、うち 65 パーセントはインフォーマルセクターでの労働に従事し、うち 2 万 6600 人は台湾人の配偶者として生活し、うち約 2 万人は不法滞在者である。インドネシア人移民の多くは家事労働などの未熟練労働者として就労しており、雇用環境や生活環境の多くの面で困

難を抱えている。そうしたインドネシア人移民たちが相互に交流する集いの場が、たとえば台北中央駅の地下モールなど、台湾都市部の各所に存在するが、そうした場として本論文で特に注目するのはインドネシア人起業家による個人商店である。序論で触れられている桃園県の中壢駅に近接する商店は、インドネシア食材の販売（1階）、カラオケルーム（2階）、営業主の住居（3階）、多目的の活動スペース（4階）を備えた複合施設であり、インドネシア人移民たちの集いの場としてさまざまなかたちで利用されている。以上の概観に続いて、(3)本論文のもとになる調査研究の手法について述べ、異なる社会経済環境への個々人の「適応」と生活基盤の「再統合」とが本論文において中心的なテーマとなることを示す。本論文のデータは、台湾都市部（台北市ならびに桃園県）における2014年6月から12月にかけての、ならびに東ジャワ州マランのアルジョウィラングン村ならびにドノムルヨ村における2015年8月から9月にかけての、いずれもルドルフ本人が単独で実施したフィールドワークによって得られたものである。

第2章は、台湾の都市部に定住し、小規模な小売業やサービス業を営むインドネシア人起業家たちの来歴を詳細に記述する。起業家たちが、親族や姻族とのネットワークを活用しながら移民先でのビジネスを育んできたこと、そして日々の商業活動のなかで、主たる顧客であるインドネシア人移民のあいだにネットワークを生みだしていることを、7名のインドネシア人企業家（ならびにその配偶者）の来歴についての詳細な記述のなかから明らかにしている。本章の7事例に登場する起業家は、博士号取得者、修士号取得者から初等教育修了者、家事労働者・ケアワーカー出身の者など多様な来歴をもち、現在手掛けているビジネスの内容についても美容院経営、衣類販売、食品販売、食堂・商店経営から文筆業まで様々である。いずれの事例についても、起業家たちは、同郷者たち、ビジネスパートナーたちとの直接的なやりとりを通じて、あるいはソーシャルメディアの活用を通じて、情報や顧客を安定的に確保しながらビジネスを営んでいる。しかしながら、起業家たちが営む社会的ネットワークは、家族親族や同郷者など既存の関係性のなかで完結するものではない。起業家たちは、台湾での就労経験のなかで得た友人や台湾人の雇用主との関係、台湾人配偶者親族との関係、あるいは台湾での高等教育によって得た知識等をそれぞれに活用している。

第3章は、インドネシア人の起業家と移民とのあいだの互恵的な関係性を明らかにする。とくに、起業家たちが、台湾都市部で就労するインドネシア人移民を主たる顧客とするエスニック・ビジネスを通じて収益を確保すると同時に、移民の生活改善のために重要な役割を果たしていることについてである。起業家たちは、自らの出身地・出自・宗教が判別可能なかたちで *toko*（食堂や食品販売等を兼ねる商店）の店名を掲げることがあり、そのような場合には、特定の背景をもつ移民たちのアイデンティティと当該店舗の利用とが結びつく。起業家たち＝商店主は、様々な困難をかかえる移民＝顧客に対して、友人・パトロン・相談者として関わることで、台湾都市部でのインドネシア人移民の生活維持、さらには移民就労をつうじた自己実現にとって不可欠の存在である。本章は、9名のインドネシア人起業家（前章初出の起業家を含む）の活動に加えて、不法就労者をふくむ移民側の生活実態をあわせて

描いている。たとえば「AB 商店」（AB Toko：本論文では匿名）を経営するインドネシア人夫妻は、商店に集う移民たち（多くがジャワ出身者）、とくに不法滞在者たちに、商店とは別の建物の一室を住居として格安で提供したり、雇用関係の情報提供をしたり、治療費を立て替えたり、必要な支援を続けている。別の起業家（女性、高卒、通訳業・移民向けシェルター経営）は、台湾人雇用主に対する訴訟において原告のインドネシア人女性に必要なサポートをおこなった。もっとも、インドネシア人起業家の生活は、移民を主たる顧客として成立するビジネスを基盤とするものでもあり、移民との間の関係性は支援／被支援の一方的・一面的な関係ではない。むしろ多面的・互恵的なものとして理解すべきである。

第４章は、台湾都市部におけるインドネシア人起業家による、宗教活動ならびに利他主義的活動、同郷者どうしの連帯の促進、同郷者への深い社会的関わりについて詳述する。社会的・宗教的活動ならびに移民コミュニティへの積極的関与によって、インドネシア人起業家たちは、移民たちの生活改善につながるような社会的連帯を生み出している。本章でとくに注目するのは、社会経済面での互恵関係のみにとどまらず、移民たちの宗教生活や生きがいの追求にもかかわりあう起業家たちの活動が、インドネシア人移民にとってのアイデンティティ、連帯、協働を涵養するうえで、さらに移民たちの社会的、宗教的あるいは私的な自己充足をはかるうえで、重要な役割を果たしていることである。本章では、宗教活動（イスラームあるいはキリスト教）に根づいた慈善事業を進める起業家の事例、商店がインドネシア人移民の男女にとっての出会いの場となっている事例等を記述し、人類学者ロジャー・バラードがいうところの「文化の巧みなナビゲーター」としての起業家の姿を描いている。

第５章は、台湾都市部での就労を終え、インドネシアに帰国した帰還移民たちの出身村への社会経済的適応ならびに生活基盤の再統合の現状を記述し、帰還後の移民個々人の生活に生じる社会経済面での変化について考察する。ここで明らかにするのは、第一に、台湾都市部から出身村への帰還後に移民自らが起業家となる（あるいはそれに失敗する）プロセスについてである。第二に、帰還移民たちが台湾就労中に得た社会経済的資源と経験とが出身村のコミュニティに何をもたらすかについてである。本章で記述する東ジャワ州マランのアルジョウィラングン村ならびにドノムルヨ村は、いずれも米、トウモロコシ、タピオカ、果物、サトウキビ等を生産する農村であり、多くの村人たちは地主所有の農地での賃労働に生計を依存している。一日の農地労働で得られる収入は３万 5000 ルピー（2.40 米ドル）にとどまっており、日々の食糧確保がかろうじて可能になるほどの額にすぎない。そのような意味での村落での貧困が海外への移民労働を促している。移民たちは、海外での就労によって得た資金を元手に、住居を在来の木造家屋から石造家屋に立て替えたりするなど、出身村での生活改善をはかる。また、引き続き農地耕作からの収入を基本としつつも、出身村において農地を購入し、さらに自ら起業家となることで、地主所有地での賃労働のみへの経済的依存からの脱却をはかる。しかしながら、このような移民就労を通じた貧困からの脱却、経済的自立、自己実現は容易ではない。本章に登場する人びとは、手元の資金が尽きるたびに再び海外での就労を求めて渡航を繰り返す。ある女性は、就労先の台湾と香港において自ら

を含め労働移民が不当な雇用環境を強いられていることを自覚する機会を得て、現在は労働者の権利を保護するためのアクティビストとして活動している。

第６章は、移民たちが起業家指向を自らのものとして内面化し、かつ故郷においての実際の起業へと結びつけていくプロセス自体に着目し、その社会経済的諸条件について考察する。インドネシア人移民たちは、海外への渡航に先立って研修への参加が法律で義務づけられている。研修は、もっぱら渡航先での生活環境や健康管理、行政的な手続き等についての概要説明を主目的としており、起業のための実用的知識を学ぶための場ではない。当初から起業を目指す移民たちは身近な経験者から将来展望を学ぶ。他方、台湾都市部でインドネシア政府やNGOが主宰する研修プログラムは、帰国後の起業にむけた実践的知識を学ぶ場となっているが、就労先の勤務時間との兼ね合い等のために参加者の数は少ない。インドネシア人移民の多くは、むしろ就労先での勤務経験や勤務時間外の副業経験（同郷者相手の小規模ビジネスの起業）、あるいは所属する移民団体での情報交換等から学びとっている（ただし、故郷への送金や就労先での勤務時間等の制約から台湾での就労期間中の起業は困難であり、多くの移民にとって起業による経済的自立は出身村において試みることが現実的である）。初めて海外に渡航する移民たちにとって、就労先で得られる賃金はかつて手にしたことのない高額な「ショック・マネー」（*uang kaget*）に映る。だが、その分「浪費」してしまうと、出身村での生活改善をはかるための十分な蓄えは得られない。海外での就労経験を出身村での持続的な生活改善に結びつけていく必要性を自覚することが、故郷での起業にむけての第一歩となる（多くの人びとは、最初の海外就労が終了した時点になってそうした「自覚」を得るがゆえに再び海外での就労に出直すことになる）。加えて本章では、移民の起業家指向は、それ自体が出身村の社会経済的制約に由来するものであると同時に、そうした制約によってさらなる制約を受けるものであることを指摘する。すなわち、起業家になることは（出身村ならびに移民就労先での）賃労働からの脱却あるいは経済的自立として理解される一方で、出身村に帰還した後も引き続き安定した雇用と収入へのアクセスが得られないことに由来しているからである。同時に、出身村での起業は、劣悪なインフラ環境や都市部へのアクセス面での制約等によってさらなる制約を受けることになる。

終章は、本論文各章で提示した知見を改めて確認したうえで、本論文の結論として次の二点を述べる。第一に、本論文が明らかにしたように、海外都市に居住するインドネシア人起業家たちが、同郷の移民労働者たちのエンパワメントのために重要な役割を果たしていること。そのような起業家たちの役割を十全に理解することで、インドネシア政府やNGOによる移民支援プログラムが補強されるであろうこと。第二に、海外の就労先から帰還した人びとは、出身村での起業において様々な制約を経験していること。経済的自立と生活基盤の再統合を果たすためには、政府・大学・NGO等による支援が必要となることである。

４．審査報告

(1)本論文は、自身がインドネシア人であるルドルフ・ユニアルトが、台湾都市部において

就労するインドネシア人移民の生活現場に身を置き（住み込み調査の手法を用いた）、丹念な聞き取り調査を重ねたことで得られた詳細なデータを基にしている。本研究科在籍の3年間に実施したフィールドワークの成果に加えて、本研究科入学以前の研究成果の蓄積を十全に活用することで、移民個人の実像を詳細に描いた浩瀚な民族誌に仕上がっている。

(2)台湾都市部に就労するインドネシア人移民についての、生活実態の細部に及んでの包括的研究としては、国際学界において本論文が初めての試みであることに加えて、インドネシア人の人類学者による海外在住のインドネシア人移民の研究としても、本論文は先駆的な試みのひとつである（インドネシアの人類学界ではインドネシア国内での研究が主流であり、海外でのフィールドワークを実施する研究者は少数である）。また、本論文は、本研究科在籍中に本人が査読制学術雑誌に投稿した複数の英文論文と国際学会・会議での研究報告との内容を元にしている。このように、調査の手法においても研究成果の公開方法においても、本論文はこれまでの研究にはない先駆的性格に満ちている。

(3)上記の論文概要でも触れたとおり、本論文は、台湾都市部での就労を経たうえでのインドネシア人移民の起業家指向は、それ自体が出身村の社会経済的制約に由来するものであると同時に、そうした制約によってさらなる制約を受けるものであることを明らかにするなど、移民の海外就労経験を、東ジャワ・マランの出身村を起点とするひとつの社会経済的プロセスとして捉え、かつその問題点を明らかにすることに成功している。だが、その一方で、台湾に定住するインドネシア人起業家については、かならずしも東ジャワ・マラン出身者ではなく、また本論文での記述が台湾移住後の来歴・活動についてのものにとどまっているため、それぞれの出身村を起点とするプロセスは明らかにされていない。

(4)本論文は、インドネシア人移民の来歴・生活実態を詳細に描く民族誌としてのスタイルを貫いており、終章を除くすべての章において、具体的事例に基づくミクロレベルの論述に徹している。だが、その一方で、移民を送り出す側、受け入れる側のインドネシアと台湾のあいだのマクロな政治経済的関係とその経緯についての考察が不足している。そのために、本論文後半で登場する東ジャワ・マラン出身の人びとが台湾を就労先とした経緯とその文脈については明らかでない。

本論文は、以上のとおり、高く評価すべき点に加えて、改善すべき点も認められる。しかし、本論文で示された新しい視点と新たな研究領域の可能性は、そうした瑕疵を補って余りあるものであり、本論文のもつ価値を何ら減ずるものではないと判断される。

5．評価

2016年7月20日、博士論文公開審査を実施し、論文内容を吟味した結果、審査委員3名は一致して、ルドルフ・ユニアルトに博士（社会人類学）の学位を授与するに値すると判断した。